機動戦士ガンダムSEED
――二つの太陽――

月奏

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日目が覚めてみると、俺はＣ．Ｅ世界の住人として転生か憑依してしまった。

ここは機動戦士ガンダムＳＥＥＤの世界なのか？　よく調べると少し違うようだ。

二つの日本が存在しているのだから。にわかとして微かに記録している原作の知識ではこんな勢力は存在していない筈だ？

世界は違えともやっぱり戦争が起こるのかな？　俺はこの世界でどんな生き方をすればいいのだろう？　悩みは尽きないや。

史実と異なる第二次世界大戦によって分断国家となった日本が、西暦がＣ．Ｅとなっ

ても全く統一せず、ナチュナルとコーディネーターの種族間戦争に否応もなく関わっていくことになり、生き残るために奮闘するお話し。

公式地図での、「日本は北海道がユーラシア連邦領、残りは東アジア領となって消滅している」という設定から構想を得て書きました。

他作品のネタ多し。やる夫スレのノリで書くので、他作品のキャラが当たり前のように出ます。

目次

第一話　転生？　憑依？　――――　1
第二話　人工の大地　――――　5
第三話　出会い　――――　12

第一話　転生？　憑依？

俺は暗闇に覆われた室内で意識を覚醒した。

頭がすごく痛い。割れる位に。炭酸で割った梅酒がおいしいからと調子に乗りすぎて沢山飲んだせいだ。今さら思うと何で常日頃酒を飲まない癖にしこたま飲んだんだと後悔で一杯だ。

体の様子を確認していると、俺はあることに気がついた。

「あれ……」

手が小さくなっていないか？　それに視界が違うような気がする。それにパジャマ姿となっていた。おかしいな？　ジャージ姿で寝た筈だ。

慌てて立ち上がって周りを見ると周りにあるものが大きくなったように見えた。

「いや、違う」

俺が小さくなったんだ。今俺が置かれている状況は訳の分からない奇奇怪怪な状況だ。目が回りそうな位に混乱していた。

気がつけば目が闇に慣れたのか周りが鮮明に見えてきた。それを利用して、この部屋にある鏡を眺めてみることにした。無意識に怖がってしまっているらしくおそるおそ

る鏡を見つめた。

「おぉ」

思わず、間抜けな声を出してしまう。

違う顔だ。見飽きていた平凡な俺の顔ではない。どこかの小説の表紙を飾っていた一人の男性キャラクターと同じ女の子と間違えそうな中性的な顔……これに驚いている場合ではない。俺は子供になっていた。いきなりの超展開に頭を抱えそうだ。そうなのに顔は特に変化のない無表情で、俺は人形になったのかと錯覚を覚えそうだ。

――C．E六〇一月二日。

「コズミック・イラ……」

コズミック・イラ。略字にするとC．E。間違いない。俺は確信する。この紀元が当たり前のようにカレンダーにあるのならば、ここはあの世界なのだろう。

機動戦士ガンダムｓｅｅｄの。

この作品は、リアルタイムで見た初めてのガンダムでガンダムシリーズを知るきっかけとなったアニメだ。だが、視聴したときの年齢が小学生ぐらいだったせいかあれに関する記録は薄く同じくあれに関する知識は全くなかった。それに最初から全部見た訳ではない。偶然やっているのを見ただけなのだ。アラスカ……サイクロプスでパーン……今でもすごいトラウマになっている。あんな死にかたはしたくないな。しかし、今

さらと思うと見たことがあるガンダム作品が種とかVガンとか描写面やストーリー面でトラウマ満載のエグイもんばかりじゃないか……。よくもまあ人格が歪むことがなかった。ある種の奇跡だ。

だとすると、俺はナチュナルかコーディネーターどっちなんだろうな？

いや――。

「しかし、おかしくないか？」

今さらが思うが何で納得しているんだ。普通は信じられないだろ!!　それにC・Eの単語を見ただけで理解し過ぎているぞ。俺は決闘者（デュエリスト）じゃないんだぞ。いつの間に変人になったんだ、俺は。

いかん、いかん、半ば現実逃避しているよな。本当の意味で冷静になろう。じゃなきゃ気がもたない。落ち着け、落ち着け。

再び周囲を見渡してみた。壁に世界地図が貼り付けてあった。それに描かれている日本列島の隣に書かれているのは――。

「えっ、日本皇国と日本連邦国……何で日本が二つあるんだ？」

コズミック・イラの勢力でこんな国、勢力は存在していたっけ？どうやら、ここは機動戦士ガンダムｓｅｅｄであってそうではない世界らしいな。並行世界の一つかな？

冴えてしまった頭脳が変な結論を導いていた。

全く訳が分からないな。酔っ払って寝たせいで変な夢を見ているのか？　いや、それにしてやけに鮮明だな。

こうして考えているうちにハッと気づけば窓から朝日が入っていた。結局一睡もできなかった。

――今思えば、なぜか名前は思い出せない前の俺は死んで、人代蒼也（ひとしろ・そうや）としての俺が始まりだったのかもしれない。所謂、転生だ。おそらくだが寝ているうちに死んだせいだと考えられる。もしそれが本当ならば信じたくて信じたくない複雑な気持ちだ。梅酒の飲み過ぎによる急性アルコール中毒が死因なんて情けなさ過ぎる。どれだけ酒が弱いんだよ……。

第二話　人工の大地

『――――アフリカ共同体首都ダカールにて大規模な反プラント理事国デモが行われました。大統領府前に複数の市民団体が詰めかけ、プラントの利益を独占するプラント理事国に対し抗議の声を挙げていました。天秤型コロニーで構成されているＬ５コロニー群〝プラント〟はその意味の通り作れないものはないと呼ばれる程の大規模な生産施設が存在しており、そこでしか作れない物産、膨大なエネルギーと工業物資は、地球にとってなくてはならない存在となっていますが、その反面膨大な利益をプラント理事国が独占しております。それに対し、安価で品質がよいプラントとの激しい競争にさらされている非理事国は貿易格差が大きすぎる、理事国だけが復興している、貿易が不均衡と強い批判を行っており、理事国そしてプラントに対する不満が高まりつつあります』

デレビからアナウンスの声が俺の耳に届いた。内容を聞く限り大西洋連邦、ユーラシア連邦、東アジア共和国三カ国で構成されるプラント理事国に、それ以外の国々で構成されている非理事国はいい感情を抱いていないようだ。

そう言えば、昨日偶然見た政治討論の番組である評論家が、理事国は再構築戦争で深

い打撃を受けたにも関わらず、プラントが生産するエネルギーと工業物資、それらを傘下や強い影響下にある非理事国に高く売りつけることで得た外貨を用いていち早く復興を遂げ経済発展をしていると発言したいたのを思い出すな。あと疑問なのは、六〇年前の戦争のつめ跡が残っているかだ。それに関してはまだ分からないのでいずれ調べないといけないな……。

何せ、東アジア共和国は独自で国内にマスドライバー基地の建造を開始していたり、ユーラシア連邦は地球温暖化によって航行しやすくなり重要度が増した北極海航路の開発を推し進めたり、大西洋連邦は軍拡と環境改善プラントの建設を行ったりするなどの余裕があるからな。

やっぱり、あの国どもは西暦時代大国であった国々が母体だけあって先を見据える力は恐ろしく高い。またどれだけの反発があろうとも実行するのだから凄い。ナチュナルとコーディネーターを棲み分ける必要があったとは思うが、コーディネーターを一か所にまとめれば膨大な利益得られることが念頭にあった筈だ。それが功を奏し、投資した強みを生かして利益を独占しているのだから。

まあそのお蔭か分からないが、非理事国側は一部を除いて復興と経済発展は遅れている。大半は発展途上国の地位を甘んじている。西暦時代からの難題である南北問題は深刻の度合いを増しているようだ。だから原作ではああなったということか……。

では、今の俺の故郷で非理事国の一つである北日本はどうなっているかというと、住んでいる場所の様子からハッキリと分かった。

「もうだいぶ時間が経ったけど、飽きないの？」

「……」

今、俺は何をやっているかと言うと、宇宙（そら）を眺めていた。ここは宇宙港。住んでいる場所と宇宙を繋ぐ出入り口であり最も宇宙に間近な施設だ。壮大な宇宙の姿に圧倒されるばかりだ。できる限り詳細に見たいあまり顔をガラスに貼り付けていた。

「コラ!!　貼り付かないの!!　汚いでしょ!!」

「ごめんなさい。柚さん」

俺を叱る女性の声に頭を下げるしかない。

俺が少し違うコズミック・イラの世界に漂着していた半年以上も経った。俺は小学生になりたての六歳児のふりをしながら現状維持を務めたこともあって身の回りについてほぼ把握していた。

まず、俺の傍にいて俺を見つめている黒髪の大人の女性は輿嶋柚（こしま・ゆう）。人代蒼也の父親からそいつになっている俺の身の回りの世話やしつけを任されている。お手伝いさんだ。母親だと勘違いして母さんと言ったときの面食らった顔が印象に残っている。しかし、年齢は分からないが若く見える女性に世話を任せるなんて、柚さんと父に当たる男とど

んな関係なのだろう……知るのが怖いことや、変なことを聞くなと説教されるのが面倒なことがあって聞くことができないでいた。

「そう言えば……蒼也と同じく宇宙を見るのが好きでしたね……」

「それは誰なの？」

「貴方のお母様。宇宙見たさに小遣いをはたいて買う位でした」

「……」

何とも言えない気分になる。

人代蒼也の母親は今から六年前に病名は分からないが他界しているようだ。柚さんの言うことには穏やかで優しい人だったらしい。写真も見たがそんな感じで美人だった。他人に聞かないと分からなくなり、それに過去形で語られているのは寂しい話だ。できれば顔を合わせて見たかったな……。後に知ったことだが、母さんの死因はＳ２型インフルエンザがもととなって発症した肺炎であったようだ。いわゆる合併症である。母親の死に、本来の人代蒼也は何を思ったのだろうか？　分からないが。

〝スペインかぜの再来〟、〝ナチュナルかぜ〟と呼ばれ、億単位の感染者と数千万規模の死者を出し、ナチュナルとコーディネーターの溝を深くさせたこの病気の犠牲となったのだ。ただでさえ両者の間は緊迫していたときに、この病によってナチュナルとコーディネーターの病気に対する耐性の差を徹底的に知らしめたのだから超常的な悪

意を感じさせる。
　余談だが、この流行をコーディネーターの陰謀だという噂が流れていたようだが、俺は全く信じていない。しかし、この出来事のせいでナチュナルのコーディネーターを見る目は厳しいものになったのは確かだろう……。
　話を元に戻そう。
「そんなに宇宙を見るのが楽しい?」
「うん、楽しいよ。だって宇宙がこんな間近にあるのだから」
　柚さんの問い掛けに、俺は本音で答える。周りから見れば目がキラキラと輝いているかもしれない。
　前のときは知っていても遠い存在であった宇宙が間近な存在になって目の前にいた。厚いガラス一枚向こう、それを越えれば宇宙だ。いかなる生命の生存を許さない清浄なる漆黒の空間……。そんななかに無数の星々が輝いている。それを見ると心がときめいてしまう。ずっと見ていても退屈はしなかった。
「残念だけどもうそろそろ時間だからこれでおしまい。到着ロビーに向かいましょう」
「うん。分かった」
　俺たちは到着ロビーの出入り口に向かう。父である人間を出迎えるためだ。どんな職に就いているのか分からないがその人は多忙な日々を送っており家に殆どいない。

今のようにときどき故郷に戻ってきて休息を取るらしい。あと蒼也には一歳年上の兄がいるらしい。月にある都市コペルニクスに留学しているようだ。どんな人となりなのか出会ったことがないので分からないが。

「蒼也、柚、久しぶりだな」

到着ロビーの出入り口にたどり着いてすぐに俺たちは声を掛けられた。声がした方角に視線を向けると、立派な体格をした男性が笑みを浮かべて温かな視線を俺たちに向けていた。

「久しぶりです。数人(かずと)さん」

柚さんの口ぶりからこの人が父なのだ。服越しでも分かる鍛え抜かれた肉体をしているな。もしかすると軍人か工場労働者などの肉体労働を生業とする仕事に就いているのかもしれない。

「……蒼也」

変なことを考えていると、父から声を掛けられた。動揺して上ずった声を出してしまう。

「何ですか?」

「お前、出会わないうちに少し変わったな」

「そうかな?」

「そうだ。少なくともこんな反応はしなかったぞ」

あら、そうなの？　どれだけ感情が薄かった……むしろ無かったの？　本物は。しかしこれが本当だとすると、疑問を持たれないか不安になる。転生・憑依という頓珍漢な現象を本当に起きたと証明することなんて常識的に考えてありえないのだが、どうしても不安になってしまう。

……取りあえずはこれだけは言っておこう。無言なのは失礼だ。

「……おとうさん」

「うん!?」

「ただいま……」

「うん、ただいま」

その言葉に父さんは最初のうちは面食らっていたが途中で笑みを浮かべて答えた。

俺は生きている。スペースコロニーという人工の大地で。何でこうなってしまったのか分からないが今のところは平穏で楽しんで生きている。これからもずっとそうあって欲しい。原作が原作なので困難なのかもしれないが、そうあって欲しいと心の底から強く思っていた。

第三話　出会い

C．E61年　L3宙域住居コロニー『高天原（たかあまはら）』

七歳になった俺は家から出て公園にいた。そこはコロニー、C．E黎明期に建設され完成した最初期のスペースコロニー、今では北日本……通称〝連邦〟でしか運用されてはいないスタンフォード・トーラス型

噂によると完成してから四半世紀以上も経ち老朽化が進んでいるため、今建設が進められているシリンダー型で三枚の大きなミラーで光を集める〝開放型〟コロニーに住民を移転させる計画が練られているようだ。……だとすると、そう遠くない未来にこの景色が見納めのときが来るということになるな。実に寂しい話だと思う。こんないい景色を眺める時間が限られているのは。

上側にある鏡によって取り込まれた太陽の光が降り注ぐ。それは、住宅や植物や巨大な湖、そして俺と手元にある本を照らしていた。俺が蒼也になる前の子供であった頃に見たスタンフォード・トーラス型の想像図そのものであった。スペースコロニーに住んでみたいと思っていた俺が今住んでいるのだから感慨深く、住んでからだいぶ時が経つが住んでいることを実感すると目頭が厚くなりそうだ。

このときが来るまで、この景色を見たときの感動を記録として頭に刻みついておこう。

「……」

通っている小学校の図書室、街の図書館から借りた本を読んでいる。

普通この年齢は授業が終わった後や休みの日は友達と一緒に遊びほうけているイメージが俺にはあるが、悲しいことに友達は一人もいなかった。どうも、俺のどこかズレているためか同級生と馴染むことができず、また本来の蒼也も人と仲良くすることができず友達を作っていなかったことも大きかった。それらのせいで周りからは地味な根暗と思われ孤立してしまい、一人でポツンといるのが殆どであった。そのうちいじめられないか不安である。何とかその孤立を打破しなければ……上手くいくだろうか？

不安で仕方ない。

「いかん、いかん」

ついつい思考がネガティブなものになった。今はこんなことを考えずに本を読むのに専念しよう。

やはり本を見る限り、この世界の歴史線上にはかつての俺がいた日本国は存在しないようだ。今の二つの日本、皇国と〝連邦〟は大日本帝国から派生したもののようだ。皮肉な話だな。皇国の前身となった〝赤い日本〟は〝かつての日本（大日本帝国）〟を否定した国で

あったにも関わらず、今では過去の日本と先祖返りしてしまっている。その反面、日本国と韓国と台湾を足して二で割ったような国である連邦は未来の日本だろう。

「あら……定位置にいるわね」

女性の声が聞こえてきた。した方角に顔を向けると、金色の長髪をした女性が立っていた。外見からして俺とさほど歳は離れていないようだ。

「……誰」

彼女は問いに答えずに、微笑んで言う。

「貴方の名前は？」

「質問……」

「名前？」

人の質問に答えず逆に問いかけてくるか。失礼な奴だな。そんな奴に答える義理はないし無視するのに限るのだが、好奇心に満ちた顔からして答えるまでしつこくつきまといそうだな……それもとても面倒くさいな。答えるか。

「……人代蒼也」

俺ながら面倒くささ丸出しの声だな。とっととどこかに行って欲しいなと本音がにじみ出ている。もうちょっと気がきいたことが言えたらいいのだが、元々コミュ障のけがある俺には無理だ。

「人代蒼也……ああ!!　貴方、蒼人(あおと)の弟さんなの?」
　答えを聞いた彼女は驚いた顔をした。
「兄さんのことを知っているのですか?」
「ええ……よく知っているわ。こまめに連絡を送ってくれるかわいい弟がいるって言っていたわ」
　驚いた。兄さんがそんなことを言っているなんて、兄さんからの手紙にはそんな素振りなんか全く見えなかったのに。
　俺の兄というか、蒼也の兄は親元から離れて月面にある都市の一つコペルニクスの寄宿制幼年学校に留学している。なぜこんなところに留学しているのかよく分からないが、もしかすると、コーディネーターであることが関係しているかもしれない。
　今現在真っただ中である夏休みなど長期休暇でも帰ってくることをしないので今まで顔を合わせたことはないのだが、俺が彼に手紙を送ったことをきっかけにお互いにこまめに手紙を送り合うようになっていた。手紙を読む限りであるが、弟がナチュナルであっても偏見の目を持たない兄という悪くない印象を持っている。
　ただ、親子仲はあまり良くないのかな?　そうではないと思いたくないがこんな勘繰りする位に互いに相手のことを聞きはしないし語りはしない。俺としては親子仲良くして欲しい。家庭内不和のせいで唯一の居場所で心安らぐことができないなんて最悪

だ。それにお互いにつらいだろうし。とは言っても手を打つ手段がないから厄介だ。今のところは静観するしかない。

「席よろしくて？」

「どうぞ」

人が物思いにふけている間に、隣に居座れてしまった。そのお蔭で俺は端に追いやられてしまった。きっぱりと拒否することができず、無意識に他人に距離を取ってしまう己が恨めしくて仕方のない。

口ぶりからして、この人は兄さんの知り合いか同級生なのかもしれない。女性と知り合いとなるとは彼は誰とでも普通に話すことができるかも。その推測が本当ならばうらやましい限りだ。少しばかり嫉妬しそうである。

「何を読んでいるのかしら」

「見れば分かる」

「そっけないわね」

苦笑しながらそんなことを言うと彼女は何かを食べ始める。よく見ると桃であった。優雅に食べる姿に、切らずにかぶりつくなんて汁がこぼれてしまって食べるのに苦労しないのかな？　そんな疑問を抱いてしまう程に上手く食べていた。

「ねえ」

「何？」
　しつこく質問してくるので怒ろうと彼女に顔を向けると、金色の瞳が俺を見つめ真剣な表情を向けていたので怒気が一気にしぼんでしまった。
「何で歴史を知ろうとするのかしら。言っちゃなんだけど別に知らなくてもいいじゃないの？」
「別に……ただ知りたいだけ。それに知りたいということに年齢は関係ないと思うけどな」
「……」
　彼女は無言となる。
「ふ、ふ、ふ。これは一本取られたわね」
　再び笑顔になる。何を考えているのか分からない笑顔だな。
「この時期について詳しく知りたいなら、『大日本帝国の後継者』という本がいいかもね」
「どんな本？」
「私その本を持っているのだけど、貸して欲しい」
「図書館か本屋で探してみる」
「やーん。つれないわね」
　面倒くさい。けれども久しぶりに身内以外とまともに会話することに嬉しさを抱い

ている俺がいた。悪くはないな。

結局、とりとめの会話は彼女が飽きるまで続けられた。終始、彼女にペースを握られてばかりであった。

こうして俺に知り合いが一人できた。しかも一歳年上の女の人だ。普段ならば喜ぶべきなんだろうけど、何か締まらなくて複雑な心中だ。